アーカス湘南ロータリークラブ
2023 年 9 月
卓話『ロータリーの友月間に寄せて』

久保田英男(鎌倉 RC)

国際ロータリーはロータリークラブ専門誌『Rotary』誌をはじめ、世界中に広がるロータリークラブの地域の視点から編集された地域雑誌を発行しています。130 カ国以上、26 カ国語で発行されています。発行部数は延べ 638,000 部に上ります。日本語で発行される「ロータリーの友」もその一つになります。ところで、ロータリー会員で長くロータリークラブに接していらっしゃる方はお気づきかと思いますが、この本家本元の英語版の『Rotary』誌は以前「The Rotarian」の名称で親しまれていました。この名称の変更は、ローターアクトクラブが国際ロータリーの会員となったことで、変更されたそうです。My ROTARY では、1911 年以降の『The Rotarian』誌を読むことが可能ですので、興味のある方は閲覧なさってみて下さい。古き良き時代のロータリーや世相を反映した内容は、ロータリー100 年の歴史を垣間見ることができると思います。

日本のロータリアンに提供される『ロータリーの友』は、現在約 8 万部毎月発行されています。「読まれることのないベストセラー」などと揶揄されることもあるそうですが、皆さんは毎号読んで頂いていますか？

『ロータリーの友』は横書きの頁と縦書きの頁という構成になっていて、横書きのページは、RI 会長メッセージのほか、月間テーマの特集をはじめ、国内外ロータリークラブ活動やローターアクト、ROTEX、米山財団奨学生・学友会などの情報が記事として掲載され、縦書きページでは、「Speech」や「この人　訪ねて」などのコーナーのほか、会員が参加する俳句・短歌・川柳、そして「友愛の広場」では日本国内のロータリークラブから寄せられた投稿などを掲載し、ロータリークラブ・ロータリアンなどが参加し、身近に感じられるような内容を掲載しています。

さて、その『ロータリーの友』2022 年 7 月号から、「Food for Thought」というコーナーを受け持たせて頂き、拙文が掲載されています。食に関するエッセイ風の内容となっていて、直接的にロータリーに触れていない内容になっています。意図としては「会員同士の会話の種になるように」ということのほかに、「『ロータリーの友』を読む習慣の一助となれば」という個人的な思いがあります。

新会員の頃、先輩より「ロータリーの友の購読はロータリアンの義務だから必ず読みなさい」と教えられました。なので、最初は全く開きもしませんでした。(やりなさい、と言われれば意地でもやらない。危険だからここには入ってはいけません、と言われて言いつけを守るような素直な子では僕はありませんでした。三つ子の魂百まで、ってヤツです。)でも、ある日、オフィスで一人お弁当を食べている時、手近にあった「ロータリーの友」を開いて

みました。ところが、どこを開いても難しいロータリー用語の頁ばかり。読むのは当時掲載されていた広告の頁だけ。すぐに読むのをあきらめてしまいました。

そうこうしているうちにクラブにも慣れ、委員会の活動も理解できるようになると、独特なロータリー用語にもなれ、知識欲も出てくるのか、やっと「ロータリーの友」を自らの意思で開くようになりました。それでも最初はどこをどう読んでいいのやら、さっぱり。

クラブから地区へ出るようになると、ますます情報は必要となり自然と読むようになります。最初は読む箇所も限定的ですが、次第にその範囲も広がり、気が付けば意外にロータリーの知識が蓄積されている自分を知ることになりました。そして、クラブ会長や地区役員、ガバナーを務めさせて頂く機会に恵まれましたが、早くから「ロータリーの友」に親しむ習慣があれば、もっと多くのことを知り、より多くを伝えられたり答えることができたのかもしれない、という思いが湧くようになりました。新会員に出会う度、かつての先輩のように「ロータリーの友」を読もうと声をかけるのですが、やはり、当時の自分同様、読みたいけどなかなか内容が理解できない、だからつい読まないまま積まれてしまう。自身の経験にオーバーラップし、早くロータリーを楽しく感じてもらうためにも、一頁でいいから読んで欲しい、読む習慣をつけるにはどうしたらいいか、と考えるようになりました。その様な時、編集部からのお声がけから、この企画が持ち込まれました。「読み物として楽しい内容」「ロータリーをテーマとしないがロータリアンにとって有意義な文」というリクエストは、まさに好機でした。

何度かの打合せを経て、「食」をテーマとした内容、タイトルは「Food for Thought」となり、前述の通り内容はロータリーには直接的に触れず、「食」に関するエッセイとトリビアチックな情報ということに決まりました。僕としては「ロータリーの友」を開く、読む、というきっかけになってくれれば、という思いが一番強かったかもしれません。ただ、「直接的」と表現したのには、意味があって、このコーナーには表面には出てこないロータリーっぽい隠しテーマを潜ましています。ただ、このことを公では伝えていないので、「ロータリーに関係のないことに頁を割くのは怪しからん」とお叱りの声も聞こえてきます。環境問題や国際奉仕、職業奉仕などにつながるようにはしているのですが・・・。

さて、実際に執筆に入り、いくつか自分の中で決めごとをしています。その一つにグルメ情報は書かない、というのがあります。「東京の〇〇料亭の何々が絶品」とか「京都なら先斗町△△(お店名)のこれ(メニュー名)」といった記事は避け、できるだけお店など紹介などは出さない方針ですが、ただし一回だけ、それが出来ななかった回があります。2022 年 11 月号に掲載された「異国生まれの日本育ち」という回です。これは、西洋料理からヒントを得た海外にはない日本オリジナルのお料理をテーマにした内容で、発祥となる店舗や料理人の名前を出しています。現存し営業を続けられているお店なので、これらを伏せると反って不自然になることから、いくつかの実名を記載して紹介しました。その回以外でも人名や店や商品名が書かれているものもありますが、一応そうした決まり事を自分に課して書いています。しかし、初稿ではあまりその点を意識せず書くので、書き上げた後、没にしてし

まったエピソードも幾つもあります。例えば、2022 年 10 月号「ムシのいい話」では秋の味覚と食糧問題をテーマに書きました。その中で栗に関するエピソードとして、ケーキのモンブランについて書こうとしました。今日は特別にその時の初稿で書いた一節を紹介します。

―――栗を使ったお菓子といえば、マロンペーストがふんわり盛られたモンブランを思い出す方も多いのでは。その原型とも言われる菓子は、アルプス山脈付近のフランス、イタリアの家庭菓子で、栗のペーストに生クリームを添えたものだったそうです。その後、フランス・パリのパティスリー「アンジェリーナ」で家庭菓子のモンブランを洗練させたものを「モンブラン」と名付けて売り出し、今私たちがイメージする「モンブラン」は、1933 年東京自由ヶ丘の初代店主が、店名の「モンブラン」に因んだ看板菓子を売り出そうと考案したものだそうです。―――

この部分は、ボツとして掲載しませんでした。店舗名が入っていることもそうなのですが、「モンブラン」というケーキのルーツとして中途半端な紹介になっていることから、切りました。これも日本生まれの洋菓子なんですね。

それから、2023 年 3 月号の「厨房、腕を選ばず」では、調理道具などを紹介していますが、このテーマは範囲が広くてほんの一部しか書くことができませんでした。初稿でもかなり絞って、選んだ内容であったのですが、字数の関係から一番切り刻んだ回なってしまいした。

―――お鍋やフライパン。フライパンは調理道具としては、片手鍋の部類になります。鍋こそ調理道具の中心的存在です。素材も、石・銅・鉄・ステンレス・アルミ・紙・ガラスなど。形状も様々、日本料理では、雪平鍋・土鍋・すき焼き鍋・・・、海外に目を向ければ、中華鍋もその代表。片手ものは北京鍋、両手付が広東や四川流。欧州ではフライパンやソースパンなどの片手鍋類から、オーブンに入れるキャセロール、パエリア鍋、スープなどを煮るストックポット。北アフリカのタジン鍋も有名ですよね。

煮炊きする鍋は、世界中にあるのですが、食文化の地域性が顕著にでる道具の一つです。寒い地方では屋内の暖を取ることので、その火を使い長時間煮込む料理が多く、深い鍋が多くなります。一方温暖な地域では比較的短い調理時間で作るため浅い鍋が使われるようです。(一部略)

ところで菓子屋では、どら焼きなど焼く鉄板(銅板)を「一文字」と言います。その名の由来は鉄板に火が通ったことを確認する際、粉を解いて横に一本線を描きます。その焼き色が均等になれば準備完了のサイン、それで「一文字」と呼ばれるようになりました。西洋ではグリル板に相当するのではないでしょうか。東京名物もんじゃ焼きですが、その名の由来は諸説あり「なんじゃもんじゃ」が語源などとも言われていますが、我論で、確証はないのですが、もともと駄菓子屋さんで子供たちの安価なおやつとして人気を博していたことから

推察するに「一文字焼き」が訛って「もんじゃ焼き」と言われたのではなかと思っています。昔は炭などで火を焚いていました。なので、本来の製菓作業が終わった後の余熱と残った水種(小麦粉を水で溶いたもの)を利用して、子供のおやつを提供したことから、「一文字のおやつ焼き」～「いちもんじやき」～「もんじゃ」に転じたのではないかと我説を立てています———

　また、どこかで書くかもしれませんが、泣く泣くカットした一文はこのほかにも多数あります。それでも読みやすく、この様なロータリー臭のあまりしないところから、ロータリーに馴染んでもらえば嬉しく思います。2023 年 7 月号から、縦書きの頁に移り、一年「米」をテーマに連載を継続しています。ご笑読頂ければ幸いです。是非、拙文だけでなく「ロータリーの友」を読んでロータリーライフを豊かになることを願っております。最後までご拝読頂きありがとうございます。

（了）

©Hideo Kubota,2023

Hideo Kubota
(Rotary Club of Kamakura)